

社会科の総合性と地図の構成

小松原

尚*

I. はじめに

高等学校社会科「現代社会」は、わが国の国際社会の一員としての役割の増大、複雑化・多様化するこの社会の実態を地理、歴史、政治・経済といった従来からの科目の成果をふまえつつ、総合的に観察し、その問題点を検討する目的で設けられた科目である(文部省, 1979)。こうして高校教育をとりまく内外の要請に応える目的で出発した「現代社会」ではあったが、高校社会科教育における対応をみてみると、「政治・経済」「倫理」による「現代社会」の代替方式の一般化をみ、国公立大学共通一次試験科目からの除外も予定されるに及び、高校の現場では「現社離れ」の傾向に拍車がかかるものと予想される。この様に科目としての確立はおろか、その存立の危機に瀕していると言ってよいであろう。

これまでの「現代社会」をめぐる議論は、社会科教育における中高の一貫性との関連を問題にした議論と総合科目としての「現代社会」の位置づけをめぐるものとに分けられる。本稿では「現代社会」の社会科総合科目としての確立という観点から「現代社会」における地図利用について検討を加えたい。

筆者がこの様な課題を設定したのは総合科目としての「現代社会」の確立は地理教育における地理巡検をはじめとする地図を生かしたこれまでの学習の多大な蓄積を正しく評価し、社会科教育において共有化し、十分活用されることによって可能となると考えるからに他ならない。ただしそのためには、これまでの地理教育において行なわれてきた地域区分や地域調査に対し新たな視角からの再考が必要となると考えられる。そこで本稿においてはまず、戦後社会科教育に果した総合科目としての地理の役割と地図学習の成果およびそれ

らの限界について確認する(II)。次に、「現代社会」教科書にみる地図利用の現状を統計的に考察し、その問題点を明らかにする(III)。最後にこれまでの分析をふまえながら現代社会のしくみとその発展方向を考えるための地図表現、地図利用のあり方をまとめたい(IV)。

II. 地理教育における地図利用の現段階

竹内(1985)の指摘にもみられるように、戦後の社会科は個別的な社会科学の研究成果をふまえて、社会についての総合的、主体的認識を生徒の中に育てつつ、生活していくための実践的知性と問題解決能力を構築しようとするものとして出発した。この理念に基づき、「民主主義」「時事問題」という総合科目の設置をみ、その後も「一般社会」や「社会」が続いた。ところが、1950年代に入り指導要領改訂に際しこうした総合科目としての社会科は「社会」の廃止とともに消え、代わって専門分野別の分科主義的な科目構成をとることになったのである。ただし、社会科の理念としての総合科目主義は完全に消失してしまっただけではなく、各科目の中で様々な実践を通じて継承されていくことになるのである。

「地理」においては、戦後「一般社会」の導入をみた時、円滑に社会科に適合し「一般社会」第1学年の6単元中3単元、第2学年6単元中5単元を地理的特色の強いもので占めた。このことは地理的分野は事実に基づく思考であり、巡検による現象把握、統計処理による図表の作成などを通して比較、区分、発展方向の検討に重点をおいており、その方法において総合科目としての適応性をもっていたという指摘をみている(班目, 1981)。

その後、分科主義の浸透に伴ない高校社会科における1年生の入門科目、総合科目的なものとして「地理」が位置づけられてきた。地理学習に公害問題やエネルギー・資源問題に敏感に反応し、

* 北海高校

教材化したし、また、高度成長政策や地域開発の中で地域の現実と住民の生活を問題にすることによって社会科の現代的課題とは何かを考えてきた。こうした中から地図を生かした社会科教育の実践も数多く生まれてきたのである。

廣田・木戸口（1978）によれば、地図学習において野外調査が不可欠であるという認識から小中学校における観察を主とする現地学習のみならず、高校でも巡検が一般的に実施されるようになってきた。この状況に対し、高校地理の野外調査は単に観察や巡検でとどまるのではなく、実際の調査活動（現地調査、報告書作成など）を伴う学習でなければならないという考えから行なわれた札幌北陵高校の実践報告例がある。そしてこの学習によって地理的な見方や考え方をのぼし、グループ活動や社会との直接交渉（訪問、聴取など）を通して生徒たちの人間形成にも役立ったという指摘もなされている。

さらに、こうした活動は1つの学校の実践にとどまらず、地域の教師集団によっても共有化され、大きな成果を生んでいる。山内（1986）で紹介された札幌地理サークルの活動がそれである。自然環境、北海道史の中での位置づけをふまえながら札幌のもつ中心性など札幌全体を見通した地誌の形でまとめられた札幌地理サークル（1980）では、主要道路に沿って、共通した歴史性や地域性をもつ地域単位ごとにまとめられ、札幌市及びその周辺の「微細地誌」を結実させているし、札幌地理サークル（1987）では札幌を舞台に展開されている様々な地理的事象を図化し視覚化し、札幌の地域性を解説する新しい都市誌の発表を試みている。

このように生活する地域に密着する形で地図を生かした教育実践は札幌に例をとっただけでも大きな成果をみている。

ところで、一方、われわれの社会をそして日本をとりまく国際情勢を地図を利用して考えることも地理学習にとって重要である。この点についてはどうであろうか。中山（1983）は学校地図帳の各国比較をふまえながら地図教育について興味深い指摘を行なっている。即ち、ヨーロッパ諸国の学校地図帳は主題図に重点を置き、一般図はさほど重視していない傾向がある。主題図が中心であ

れば生徒はこれらの地図に目を通し、文章のように一元的なものでなく、二元的・空間的な状況認識を行なえる。これに対しわが国における学校地図帳は一般図中心であり、主題図もあるものの小さくて見にくい。

このことは、わが国の地図教育が地図を見て個々の地名や地域区分を記憶することに重点があるものの、地図に記載された事項を通して考え、地図を用いて新しい発想を展開していく目的には縁遠いものとなっていることを示していると考えられる。

以上の考察から、戦後地理教育における地図利用は身近な地域の学習つまりミクロな次元での学習においては威力を発揮したものの、マクロな次元での学習では一般図中心の学校地図帳の問題点にみられるように十分にその機能を発揮しているとは言い難い現状を確認した。この様な地理教育における地図利用の現状は国際化の進展するわが国をとり巻く諸情勢の中では社会科の総合科目的役割の側面での限界を示すことになったと考えられる。

III. 「現代社会」教科書にみる地図掲載状況

今日の複雑化する社会環境を総合的にとらえ指導し「科目あって教科なし」といわれる社会科の現状を克服する目的で成立をみた「現代社会」において、これまで検討した地理教育における地図利用の成果がどのように生かされ、その限界性をどのように克服したであろうか。それを検討するために「現代社会」教科書にみる地図掲載の状況を比較検討してみよう。

統計的比較に使用した教科書は16社26冊である¹⁾。これらのうち地図をまったく掲載していないものはみられなかったがその数において大きな差異がみられた。表1に示したように、5枚未満の教科書が2冊ある一方、20枚以上のものも3冊みられる。10～14枚が11冊と多く次いで5～9枚となっており、「現代社会」教科書においても地図の掲載は活発であることがわかる。

次に高等学校学習指導要領（社会）の中項目に沿って地図掲載状況をみると、①現代と人間の項目は「生徒の身近な生活に関する諸事象を通して、現代社会の基本的な問題を考えるための糸口であ

表1 「現代社会」教科書における地図掲載状況

		掲載なし	1～4枚	5～9枚	10～14枚	15～19枚	20枚以上	計
掲載地図総数による分類		0	2	11	11	4	3	26
中項目別	①	2	16	0	0	2	0	
	②	8	17	0	0	0	0	
	③	6	19	1	0	0	0	
	④	1	20	5	0	0	0	
	⑤	0	0	0	0	0	0	
	⑥	14	12	0	0	0	0	

注) 中項目名称は以下のとおり。

- | | |
|----------------|----------------|
| ① 現代と人間 | ② 現代の経済社会と国民福祉 |
| ③ 現代の民主政治と国際社会 | ④ 人間生活における文化 |
| ⑤ 青年と自己探求 | ⑥ 現代に生きる倫理 |

る」(文部省, 1979) こともあり, 26 冊中 24 冊が地図を掲載している。これらの中には, この項目に 18, 19 枚の地図を使用した教科書が 2 冊みられる。次に 26 冊中 26 冊が地図を掲載している項目に④人間生活における文化の項がある。この項目ではほとんどの教科書において図幅数は多くはないものの地図掲載をみている。さらに 26 冊中 3 分の 2 以上の教科書で地図掲載の項目として②現代の経済社会と国民福祉, ③現代の民主政治と国際社会の項がみられる。その一方でまったく掲載をみなかったのは⑤青年と自己探求の項であった。以上のように, 「現代社会」教科書においては, 各教科書間, 項目毎で地図掲載についてかなりの差異のみられるものの, 問題提起, 文化, 経済, 政治分野で地域区分, 相互関連を主題図を使って表現しており, 掲載枚数でみても相当多数のもののみみられることがわかった。

ではこれらの教科書においていかなるテーマの地図がいかなる項目にて掲載されているのであろうか。そのために, 現代の世界を包括的に表現し, 多くの教科書で採用されている 4 つのテーマを抽出した。表 2 に示したのがそれである。尚, 教科書本文のみならず, 表紙および裏表紙見返しに掲載

されているものも検討に加えた。EC などの経済統合, OPEC などの生産国同盟をテーマとした地図は中項目にとらわれない見返しへの掲載が多い。同様の傾向は地域的集団安全保障をテーマとした地図にもみられる。本文への掲載状況では, 前者は①現代と人間, ②現代の経済社会と国民福祉, 後者は③現代の民主政治と国際社会の項で利用されている。さらに, 国際紛争をテーマとした地図は見返しへの掲載はみられず, ③現代の民主政治と国際社会での利用が 14 冊中 13 冊となっている。また, 世界の宗教をテーマとした地図も見返し掲載は 1 冊のみで⑥現代に生きる倫理, ④人間生活における文化の項目での掲載がなされている。つまり, 経済統合や生産国同盟をテーマとしたものは問題提起および経済的分野での掲載をみ, 地域的集団安全保障体制をテーマとしたものは政治的分野で, そして世界の宗教をテーマとしたものは主として文化・倫理分野で掲載がなされている。

このようにテーマと利用分野とがほぼ固定的であることがわかった。ところで, 現代世界の構成を考える上では, たとえば国際紛争は東西対立が軸となり, 中にはそれに宗教紛争がからんでくる

表2 主題図の主なテーマと利用されている中項目

	①	②	③	④	⑥	見返し	掲載教科書数合計
a. 経済統合・生産国同盟	2 冊	3	0	0	0	11	16
b. 地域的集団安全保障	0	0	4	0	0	9	13
c. 国際紛争	1	0	13	0	0	0	14
d. 世界の宗教	0	0	0	5	10	1	16

注) ①～④, ⑥は前掲表 1 注に同じ。

ことからわかるように、相互に関連したものと
してそれぞれのテーマをとらえる必要にあること
はいうまでもない。既に述べた4テーマについて
1枚の地図上での相互の重ね合せの状況を示した
のが表3である。これによると、経済統合・生産

表3. テーマ相互の同一図面における重ね合せ状況

a. 経済統合・生産国同盟	0冊	1	9	a
b. 地域的集団安全保障	0	1	b	
c. 国際紛争	0	c		
d. 世界の宗教	d			

国同盟(a)と地域的集団安全保障(b)の重ね合せは9
例みられるものの、(b)と国際紛争(c)、(a)と(c)の重
ね合せはそれぞれ1例をみるのみ、また、世界の
宗教(d)については他の3テーマとの重ね合せはみ
られない。

表4 主題図のテーマ別にみた同一図面における
掲載事項数

	1~4	5~9	10~14	15~29	30以上
a.	2冊	14	0	0	0
b.	10	1	3	0	0
c.	0	2	1	10	1
d.	3	9	4	0	0

注) a.~d.は前掲表2.3のa~d.に同じ。

次に表4によって各テーマごとに、1枚の地図
上に掲載されている分類事項をみてみると、特に
(c)において多くの事項を掲載している地図の多い
ことがわかる。さらに、表3によって確認された
(a)と(b)が同一図面に記載される場合の多い点を考
慮するならば、同一図面における記載事項が多岐
にわたっていると考えられる。

以上、表3、表4の分析から明らかになったこ
とは「現代社会」教科書に掲載されている地図は
多数の事項を掲載しているものの、その割に内容
は一面的であり、テーマ相互間の関連性を地図化
する工夫に欠けるという傾向を指摘できる。

IV. 地図の構成における視点の転換

「現代社会」の創設をみたとき、社会科におい
てどの科目担当教員によってこの科目が担当され
るのが1つの問題となったが、川合・地理編集部
(1981)の報告によれば、調査対象111校中64
校において何らかの形で「地理」専攻担当が「現

代社会」を担当していると指摘されている。この
ように「地理」担当教員が「現代社会」を指導す
るのであれば、既にIIにおいて確認された地理教
育のミクロの部面の成果を活用し、身近なそして
具体的な地域事例に則して「現代社会」を展開し
ていくことになろう。ただしこうしてとらえたミ
クロな地域の問題をマクロな現代社会の問題と関
連づけて把握するには大きな困難が横たわってい
る。それは、マクロな問題を整理しミクロな問題
との結節点を示す役割を果たすべき主題図が、前
節で指摘しておいたように形式的、概括的である
ためその役割を十分果しているとは言い難い状態
にあることに他ならない。この困難を解決に導く
ためにはこれまでの身近な地域の問題=身近な問
題という視点を改め身近な問題からとらえなおす
ことが必要となっているのではなからうか。

ところで「現代社会」にはマスコミからの具体
的な教材の呈示のみられた点を見逃さない。朝日
新聞社では高校教員からの投書がきっかけとなり、
政治、経済、社会にかかわる情報とその解説
を主とする「現代社会~高校生とともに」を毎週
日曜日に連載し、1982年3月から85年12月まで
3年9か月にわたって続けた。記事は各年度ごと
にまとめられ、加筆補正され、朝日新聞社編(1983,
84, 85, 86)として出版されている。こうして提
供された300項目余りの情報は身近な問題からの
「現代社会」への接近を考える上で貴重な素材と
なっている。そしてこうして示された身近な問題
を地図化するための足がかりとして高野(1984)
の指摘が参考になる。即ち地球規模の問題をとら
えようとする場合、国家をはじめとするこれまでの
地域区分を固定的に利用するのでは不十分であ
り、問題状況により地域区分、地図のテーマの重
ね合せ方、図法を工夫する必要性を具体的に示し
ている。

この指摘をふまえて地理教育における地図の構
成においても新しい成果の発表をみた。斎藤・赤
松(1983)は戦後の東西問題における米・ソの位
置関係を正しく理解させる上で北極中心の地図を、
また、フォークランド紛争における資源領有
権をめぐる側面を南極中心の地図によって正しく
理解されることを論じている。さらに矢島(1986)
は合衆国など連邦制の国々では経済活動の側面で

国家単位に加えて各地域（州）単位で日本と深く結びついていることが多い点を指摘し、この視点からわが国に輸入されている小麦を例に各種類別にその生産分布が特定地域に集中している様子を地図化し、わが国と合衆国の各州との結びつきを理解させる試みを展開させている。

このように「地理」における地図の構成においてはマクロな問題を身近な問題とするための試みを確認できた。この様な試みを個別の点的な試みに終わらせることなく面的に拡大し「現代社会」へ応用していくことが社会科における総合性確立のための地図の構成につながるものと考えられる。

注

1) 出版社略称と教科書番号は以下のとおり。

清水 008, 二宮 014, 二宮 015, 東学 019, 学研 020, 好学 021, 東書 022, 中教 023, 実教 024, 実教 025, 三省堂 026, 三省堂 027, 教出 028, 清水 029, 清水 030, 帝国 031, 帝国 032, 山川 033, 数研 034, 一橋 035, 一橋 036, 二宮 037, 自由 038, 自由 039, 第一 040, 第一 041。

文 献

朝日新聞社編（1983, 1984, 1985, 1986）：『現代社会』朝日新聞社。

川合元彦・地理編集部（1981）：「現代社会」と「地理」についてのアンケートの結果報告。地理, 26, 2号, 75～78ページ。

斎藤仁・赤松輝夫（1983）：「現代社会」と地図の扱い。地理, 28, 8号, 47～54ページ。

札幌地理サークル編（1980）：『北緯43度札幌という街』清水書院。

札幌地理サークル編（1987）：『ウォッチング札幌』北海タイムス。

高野孟（1984）：『世界関連地図の読み方』PHP研究所。

竹内常一（1985）：「現代社会」編成の視点。三省堂高校社会科教育ぶっくれっと, 4号。

中山正民（1983）：社会科教育における地図の役割。地理, 28, 8号, 11～20ページ。

班目文雄（1981）：新科目「現代社会」への取り組み方。地理, 26, 8号, 11～14ページ。

廣田芳男・木戸口道彰（1978, 84再掲）：札幌北陵高校における地理野外調査5ヶ年の実践。札幌地理サークル「会誌」17号, 10～14ページ,（北陵高研究紀要3号, 1978, 初出）。

文部省（1979）「高等学校学習指導要領解説」社会編, 22ページ。

矢島舜孝（1986）：日本との結びつきを観点としたアメリカ合衆国の理解。地理, 31, 2号, 131～137ページ。

山内正明（1981）：札幌における地域研究の動向。札幌地理サークル「会誌」19号, 24, 25ページ。